

## 5. 域学連携活動「平成27年度 こたろう大学～生坂あそび隊～」

人間健康学部スポーツ健康学科 犬飼 己紀子

域学連携事業「こたろう大学～生坂あそび隊～」は今年度3年目という節目を迎えた。生徒との関係のみでなく教師集団との連携が生まれ、本事業の目的を双方の指導者が共通理解をして進められたことは大きな成果である。大学においては、生坂小学校との連携に関心を寄せる学生が、事業連携を担当する教員のゼミナールを希望して集まるなど、学生の教育効果も期待される状況となっている。運動遊びを通じて生徒の心身の育ちをねらうと同時にサポート学生の人間関係構築力を引き出すといった双方向の教育効果をねらい進めてきたこれまでの活動が定着してきたといえよう。

子どもたちにとって「遊び」は、体力・運動能力の向上など身体的発達に留まらず、知的・心的・社会的成長にも効果が期待できる意味深く重要な要素であることは周知のとおりである。学生等は、まず子どもたちと直接対面してその実態を体験的に知ることには大きな意味がある。子どもたちには“遊び”の要素を取り入れ、学生と体当たりして駆け回り身体を動かすことが「楽しい」と実感する体験を目指してきた。運動能力向上といった目的のみならず、課題解決型の活動を導入し、協力、支え合い、達成感などを味わう中で共に活動する仲間自分にとって必要で大切な存在である、という気づきを起こさせ生徒の社会性（人間関係構築）育成につなげることを意識した。

### （1）生坂小学校からの提案

（「平成26年度をふり返ってより」）

平成26年度の活動をふり返り、平成27年度には

次のような提案と希望が寄せられた。

#### 平成27年度の活動についての提案

- ・ 投げる、打つ、走る、回るなど運動の特性に注目した体づくりや体の動かし方。
- ◎ 人間関係のつくり方を目当てとしたGWT。疎外されたり、集団行動がとれなかったりする友だちと、どう関わり活動していくか。自分からどう歩み寄って集団参加していくか。
- ◎ 来年度に向けて
  - ・ 本校の体力向上に向けての取組
  - ・ 言語活動とつないだ「遊び」の活動
  - ・ 活動の内容について、松本大学犬飼ゼミと本校研究チームで検討して、実施計画を作成しながら、取り組んでいく仕組みを作る。

### （2）生坂小学校が希望する

#### 「こたろう大学～生坂あそび隊～」のねらい

GWTや運動遊びを取り入れて、よりよい人間関係づくりを築くための研究を推進し、子どもたちの「心の健康」と「体の健康」の両面を成長させていきたい。

### （3）「第一回こたろう大学」職員のふり返りより

（生坂小学校）H27.5.20

#### 1) 感想

- ・ わかりやすい遊びや動きで、初めてやる内容でも楽しめていた。仲間作りで、自分から誘いかけるといった大切なコミュニケーション能力を

### 【実施期日及び日程】

生坂あそび隊 実施期日	1日の時間割	対象学年 他	備考
第1回：5月15日（金）	10：40～10：45	活動内容共有	今日の活動のねらいについて教師と共有。  平成27年度は、低・高学年2ブロックで実施。
第2回：6月26日（金）	10：50～11：50	1・2・3年生	
第3回：9月25日（金）	13：45～14：45	4・5・6年生	
第4回：10月30日（金） （第3回は予定を延期し、行事の重なる時期を避けて実施した。）	16：45～15：20	まとめ	

培う活動なのかなと感じました。

- ・運動会特別時間割に入る直前に、1・2・3年生というグループで活動したことは、3年生にとってリーダーシップをとる練習になり、1年生にとっても3年生と一緒に行動することで、よい見本がいて「3年生のまねをするといい」ことがわかり、今週とてもいい活動につながっています。3年生の指しゃぶりがなくなり感心しました。
- ・運動やゲームで人間関係を築いていくという考えにとっても共感できます。
- ・意図のないグループづくりに始まり、表現力、体力づくりなど様々な要素が盛り込まれていることに感心させられました。
- ・よく考えられてゲームを組み立ててあるので、子どもたちも引き込まれていって、仲良しになったり身体を動かしたりしていました。A君も仲間づくりをさそってもらってできていた。
- ・自分自身がいまいち目的などよくわかっていないまま見にいってしまったが、子どもたちはみんな楽しそうだった。
- ・子ども同士が多人数で様々な遊びを通してふれあう、かかわりあう機会の場があり、すごくよいと思いました（教室の中では、少人数過ぎて成立できないため）。子どもたちも、多くの仲間とかかわれることができ、とても楽しそうだったし、十分に身体も動かすことができていた。
- ・ゴムを使つての運動は手軽で、アイデアも生かせていていいなと思いました。

## 2) 今後の活動に向けて

- ・“数の力”ではないですが、連学年や低・高で分けて大きな集団で学習することが必要なのかなと思います。授業のきまり、コミュニケーションスキルの再確認ができるかな…。
- ・犬飼先生は色々な実践をしていると思うので、それをやっていただく。できたら、協調しなければできなかったり、助け合わなければ早く達成できなかったりするものがあるといいなと思います。途中で、振り返る時間（ゲームの途中で考え合ってみるとか）があるといいような。
- ・本校の課題に関連づけられる内容を盛り込んだ展開ができれば、有意義な活動となるのではないのでしょうか。

ex.自然な流れの中で、自分の気持ちを相手に伝えていくような活動

楽しみながら柔軟性を高めていくような動きづくり

- ・レクなどゲーム的に扱えばおもしろいなと思った。
- ・活動の前に目的を提示しておく（体育館に貼っておくとか）ただ遊んだだけにならないのではないのでしょうか？と思いましたが、子どもたちはよく分かっているのかな…。
- ・コミュニケーション能力が子どもたちの課題ですので、昨年の方針を引き続き今年度も据えて活動を行っていくとよいと思う。
- ・今後も、今回のような内容のものをやっていただきたい。生坂は、大人（地域の）対子どもの関わり（クラブ・わくわく）は多いが、子ども同士のかかわりの場（それも多人数での）は少ないので、「生坂あそび隊」は貴重。

## 3) 子どもの様子から

- ・学年、男女関係なく取り組める素直な児童の姿に、驚きと感動を覚えました。
- ・楽しい活動を教えてもらって、やらせてもらってうれしかったようだった。夢中で取り組んでいた。

## <全体を通して>

- ・学校での挨拶はわりとできるのに、外部の方と会った時は挨拶ができなくてびっくりしました。課題だなあと感じます。

## 4) <第2回に向けて>

※引き続き大事にしていきたいこと

- ・コミュニケーション能力を培う活動に
- ・リーダーシップをとる練習にも
- ・運動やゲームを通して人間関係づくりを
- ・コミュニケーションスキル向上、体力向上の両方を
- ・多人数で遊びを通して関わり合う機会として
- ・大きな集団で学習する経験を

※次回に向けて検討したいこと

- ・振り返る時間があるといい  
→ 限られた時間の中でテンポ良く進められているので、終了後教室でどうか？
- ・それには活動の前に目的を明らかにしておきたい  
(学習課題…協調性？ 助け合い？ 伝え合い？ 打ち合わせが必要)

- 開始前に職員で確認してから、犬飼先生  
にお願いしたらどうか？  
堅苦しく「無心に遊ぶ」というポリシーか  
ら外れてしまうか？！
- ・コミュニケーション能力が子どもたちの課題  
→ 遊びながら自分の気持ちを相手に伝えて  
いく活動を
- ・楽しみながら課題である柔軟性へのアプロー  
チもあると嬉しい。
- ・当日までに、自尊感情調査を行い、今後の変  
容の様子をとらえたい。

動を盛り込んだ。

今年度、低・高学年の2グループで授業を進めたことは、集団の規模として適当であり異年齢の集合体は、学年の能力差をカバーするための支え合いや協力が生まれ、生徒の多様な姿を引き出すことにつながった。

※多人数での子ども同士のかかわりの場が少ないので、「生坂あそび隊」は貴重!!

#### (4) まとめ

##### 1) 授業内容の振り返りの共有とその効果

平成27年度は、中沢寛教頭先生より全4回全ての振り返りと感想(教員)を寄せていただいた。

第3回前には、事前に体力測定の結果を見ての目標提案など、双方向型の連携事業となったことは、毎回の授業の組み立てに有効に働いた。

第4回(最終)を前にして、高学年の生徒に3つの質問をし、応えを色別の付箋に書き込み可視化しておくよう依頼した。

質問1. こたろう大学の最終回で、あなたがしたいことはどんなことですか。青付箋

質問2. 「1」をすることで、あなたはもうなりたいと思っていますか(目標)。ピンク付箋

質問3. 目標を達成するために、あなたはどんな行動をしようと思いますか。緑付箋

上記3つの質問への答えは、第4回目の授業に同行した学生3名に、生徒の書いた付箋の中で「共感する内容のコメント」をピックアップしてコメントするよう依頼し、自分の体験を交えて生徒の前で発表をしてもらった。自分の書いたコメントに大学生が自身の体験を交えた話で返してくれた、といった体験は生徒等にどう響いたであろうか。

##### 2) 平成27年度をふり返る

運動能力では柔軟性と投力の向上を意識しつつ、低学年(1~3年)では十分な運動量を盛り込むこと、解放された雰囲気の中で自由な発言を引き出すことに留意した。高学年(4~6年)では、活動を通じ自己を肯定して受け止めるための仲間との関わりを生む言葉の掛け合い、指導者の姿勢を意図した活